

稲・大豆作情報（NO. 6）

Ⅰ. 水稻作況情報田の生育概況（8月6日現在）

品 種 場 所	移植日 栽植株数	年 次	現在の生育状況				概況
			草 丈 c m	茎 数 本／㎡	葉 齢	葉色 SPAD	
夢しずく 上峰町	6/7 15.8株/㎡	本 年 平 年 平年比	101.0 93.6 (108)	299 312 (96)	13.1 13.0 (+0.1)	39.4 35.4 (+4.0)	8/3まで降雨は殆ど無く、35℃以上の高温多照で経過していたが、8/4以降一時的に降雨があった。 ○草丈は「夢しずく」で平年より高く、「ヒヨクモチ」で平年よりやや低い。 ○茎数は、「夢しずく」、「ヒヨクモチ」とともにやや少ない。 ○葉齢から見た生育の早遅は、「夢しずく」、「ヒヨクモチ」とともに平年並み。
ヒヨクモチ 千代田町	6/20 16.0株/㎡	本 年 平 年 平年比	64.7 66.9 (97)	686 700 (98)	12.9 13.0 (-0.1)	39.1 38.3 (+0.8)	
ひなたまる 千代田町	6/20 17.6株/㎡	本 年 平 年 平年比	73.0 - -	400 - -	12.5 - -	- - -	

注1) 各品種 前作：麦

注2) 施肥及び病虫害防除は地区基準に準ずる

注3) 平年値は、過去10年間（H27～R6）の平均値

注4) 「さがびより」は本年は情報田を設置しておらず、以下の農業試験研究センター米づくり情報を参考としてください。

注5) ひなたまるはR7年から作付けのため、本年のみの記載になります。

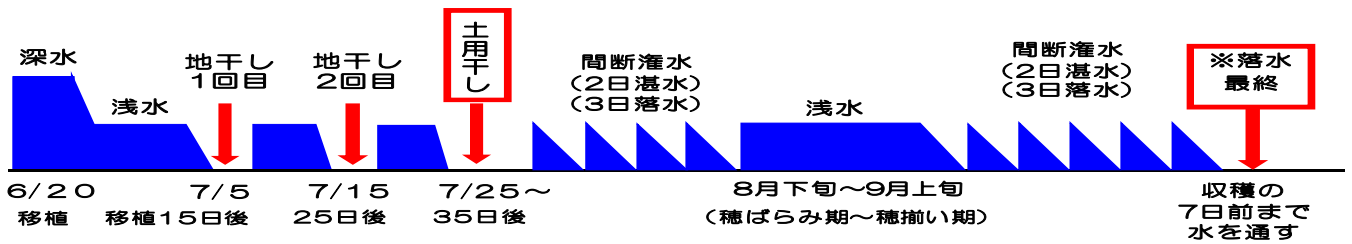
◆農業試験研究センター米づくり情報 6号 8月7日（抜粋）

移植日	項目 品種	年 次	草 丈 cm	茎 数 本／㎡	葉 齢 L	葉色 SPAD	概 況 (平年または前年との比較)
6月18日	夢しずく	本 年	88.0	378	12.6	40.7	【気象】 7月30日～8月5日まで ◆平均気温…1.8℃高い ◆日照時間…長い(平年比 136%) ◆降水量…少ない(平年比 38%)
		平 年	83.6	404	12.6	39.6	
		平年比(差)	105	94	(±0)	(+1.1)	
	ヒノヒカリ	本 年	77.6	487	12.8	37.8	【生育】 ◆草丈 「夢しずく」、「ヒノヒカリ」はやや高い、「ひなたまる」はやや低い、「さがびより」、「ヒヨクモチ」は高い。 ◆茎数 「夢しずく」は少ない、「ヒノヒカリ」はやや少ない、「ひなたまる」、「ヒヨクモチ」は多い、「さがびより」は平年並み。 ◆葉齢 「夢しずく」、「ひなたまる」、「ヒヨクモチ」は平年並み、「ヒノヒカリ」、「さがびより」はやや進んでいる。 ◆葉色(SPAD 値) 「夢しずく」は平年よりやや濃い、「ヒノヒカリ」、「ヒヨクモチ」は平年並み、「ひなたまる」は淡い、「さがびより」はやや淡い。
		平 年	74.9	514	12.4	37.5	
		平年比(差)	104	95	(+0.4)	(+0.3)	
ひなたまる	本 年	73.8	437	13.2	38.6		
	前 年	75.8	373	13.2	43.6		
	前年比(差)	97	117	(±0)	(-5.0)		
6月20日	さがびより	本 年	76.8	511	12.8	37.6	
		平 年	71.8	505	12.6	38.6	
		平年比(差)	107	101	(+0.2)	(-1.0)	
	ヒヨクモチ	本 年	70.2	817	13.1	38.3	
		平 年	66.2	739	13.0	38.7	
		平年比(差)	106	111	(+0.1)	(-0.4)	
留意点	○「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」は幼穂形成期を迎えており、「さがびより」もまもなく幼穂形成始期となる。穂肥診断に基づき穂肥を施用する。 ○早生品種は穂ばらみ期～穂揃い期まで浅水管理を行う。中生品種は引き続き間断灌水を行う。晩生品種については、幼穂形成期前には中干しを終わらせ、間断灌水に切り替える。 ○農業技術防除センターの発生予察情報及び圃場を確認し、適期防除に努める。						

※耕種概要等は前号参照。

2. 水稻における今後の管理

○水管理 ～ 圃場の状況に応じた水管理の徹底 ～



「夢しずく」

・早植えの「夢しずく」(5月下旬～6月上旬移植)は、まもなく出穂期を、普通期の「夢しずく」(6月中旬移植)は、穂ばらみ期を迎えている。

・早植え、普通期の「夢しずく」は、水の要求度が高い時期のため穂揃い期まで浅水状態で湛水を保つ。

「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」、「さがびより」、「ヒヨクモチ」

・「ヒノヒカリ」「ひなたまる」は幼穂形成期を迎え、「さがびより」では、8月10日頃から幼穂形成期を迎える見込みである。

・幼穂形成期以降は、稲が水を必要とする時期なので、「中干し」を継続している圃場では早急に入水し、穂揃い期まで浅水で湛水状態を保つ。

・「ヒヨクモチ」は、8月15日頃に幼穂形成期を迎える見込みである。

○穂肥 ～ 散布時は入水し、湛水状態で施用 ～

「ヒノヒカリ」

・「ヒノヒカリ」は、幼穂形成期を迎えており、穂肥施用時期となっている。

・高温が続くと、光合成で生成した澱粉の殆どを呼吸で消費し、粃への澱粉の蓄積が不足する。

施用時期が遅れないように表1の穂肥診断基準(草丈・葉色・幼穂長)に基づき、穂肥を施用する。

★「ヒノヒカリ」の穂肥施用のポイント

①出穂前18～20日(幼穂の長さ3～5mm)に施用。

②草丈が80cm以上で葉色が濃い(SPAD値40以上)場合は施用しない。

③草丈が80cm以下で、葉色が薄い(SPAD値34以下)場合は、2日程度早める。

(出穂前22～20日で幼穂長1～2mm)に施用。

表1.「ヒノヒカリ」穂肥診断基準

幼穂形成始期の草丈	葉色	施用時期		穂肥施用量	
	葉緑素計	出穂前	幼穂長	N成分 kg/10a	BB602 kg/10a
80cm以下	34以下	20～24日	1～2mm	3.0	20.0
	34～38	18～20日	3～5mm	3.0	20.0
	38～39	16～18日	5～15mm	2.0	12.5
	40以上	—	15～30mm	—	施用しない
80cm以上	34～38	18～20日	3～5mm	2.0	12.5
	38～39	16～18日	5～15mm	1.5	10.0
	40以上	—	15～30mm	—	施用しない

※隣接圃場が「ヒヨクモチ」だと葉色が淡く見えますので留意してください。

「ひなたまる」

- ・「ひなたまる」は、幼穂形成期を迎えており、穂肥施用時期となっている。
- ・施用時期が遅れないように下の穂肥施用のポイント（草丈・幼穂長）に基づき、穂肥を施用する。

★「ひなたまる」の穂肥施用のポイント

- ①出穂前 18～20 日（幼穂の長さ 5mm 程度）に施用。
 - ②草丈が 80 cm以下の場合、窒素成分で 3 kg/10a（BB602 で 20 kg/10a）を施用する。
 - ③草丈が 80cm 以上 85 cm未満の場合は、地力に応じて減肥する。
 - ④草丈が 85cm 以上の場合は、穂肥施用は控える。
- ※出穂前 15 日以降の穂肥は、玄米タンパク値を上昇させるので施用しない

「さがびより」

- ・「さがびより」は、8月10日頃から幼穂形成期を迎える見込みである。
- ・施用時期は、幼穂長 5～10 mm が基準。5mm に達したのを確認し施用する。
- ・本年は、平年に比べ草丈が低く、分けつ数も少ないため「さがびより」の穂肥診断基準は、下記のとおり県基準に準じた基準での診断とする。（平坦～山麓まで共通）

★「さがびより」の穂肥施用のポイント

- ①早くても幼穂 5mm を確認してから施用する。
- ②出穂前 18 日（幼穂の長さ 10mm ）に施用。
- ②草丈が 75cm 以上で葉色が濃い（SPAD 値 37 以上）場合は施用しない。
- ③草丈が 75cm 以下で、葉色が薄い（SPAD 値 33 以下）場合は、2 日程度早める。（出穂前 22～20 日に施用）

表 2. 「さがびより」穂肥診断基準

幼穂形成始期 (幼穂長1mm) の草丈	葉 色		施 用 時 期		穂肥施用量	
	群落	葉緑素計	出穂前	幼穂長	N成分 (kg/10a)	BB602 (kg/10a)
75cm以下	2.5以下	33以下	18～20日	5mm	2. 5	15.6
	3.0	33～37	18日	10mm	2. 0	12.5
	3.5	37～38	16日	15m m	1. 0	6.0
	3.8以上	39以上	施 用 し な い			
75～80c m	3.0以下	36以下	18～20日	10～15m m	1. 5	9.4
	3.0以上	37以上	施用しない			
80cm以上	施 用 し な い					

※葉色が濃い圃場や幼穂長が 15mm以上になっている圃場は、穂肥は施用しない。

「ヒヨクモチ」

- ・「ヒヨクモチ」は、8月15日頃から幼穂形成期を迎える見込みである。
- ・施用時期が遅れないように表3の施肥基準を参考に穂肥を施用する。

表 3. ヒヨクモチの穂肥施肥基準

	穂肥Ⅰ施用量(kg/10a)	穂肥Ⅱ施用(kg/10a)	実肥施用量(kg/10a)
施用時期の目安	8月15～17日頃 (幼穂形成始期 幼穂長1ミリ頃)	8月25～27日 (穂肥Ⅰの10日後)	穂揃期 (9月8日～10日頃)
LPBB804	40	—	—
BB602	25	10	10

※「元肥一発肥料」を施用した圃場で、穂肥Ⅰ～Ⅱの時期に葉緑素計（SPAD）で 40 を切る場合、窒素成分で 2 kg/10a 程度（BB602 15 kg/10a）施用する。大豆跡では、上記の 5 割未満に減肥して施用する。

○台風対策（台風の接近が懸念される場合の事前及び事後対策）

- ・台風接近時 → ①強風による稔実阻害（不稔、白穂などの発生）や登熟阻害（粃ズレにより病気や雑菌の感染）が懸念されるため、深水管理とし稲体の振動を少なくする。
②いずれの品種も、茎葉の繁茂度が高く、水分の蒸散量が著しい時期となるため、必ず深水・湛水を行う。（中干し中であっても必ず深水管理とする）
- ・台風通過後 → ①茎葉の損傷により根の老化が進むことがあるので、台風通過後は必ず新しい水と入れ替えて、こまめに間断灌水を行い、根の機能維持・生育回復に努める。
②水田に海水流入による浸冠水や潮風害を受けた場合は、直ちに排水し真水と入れ替える。
できれば掛け流しを行って除塩するか、少なくとも2～3回は水を入れ替え、生育回復に努める。
③台風通過後は受光体制が乱れ、ウンカや白葉枯れ病等が発生しやすくなるため、トビイロウンカの発生には十分注意し、場合により薬剤防除を検討する。

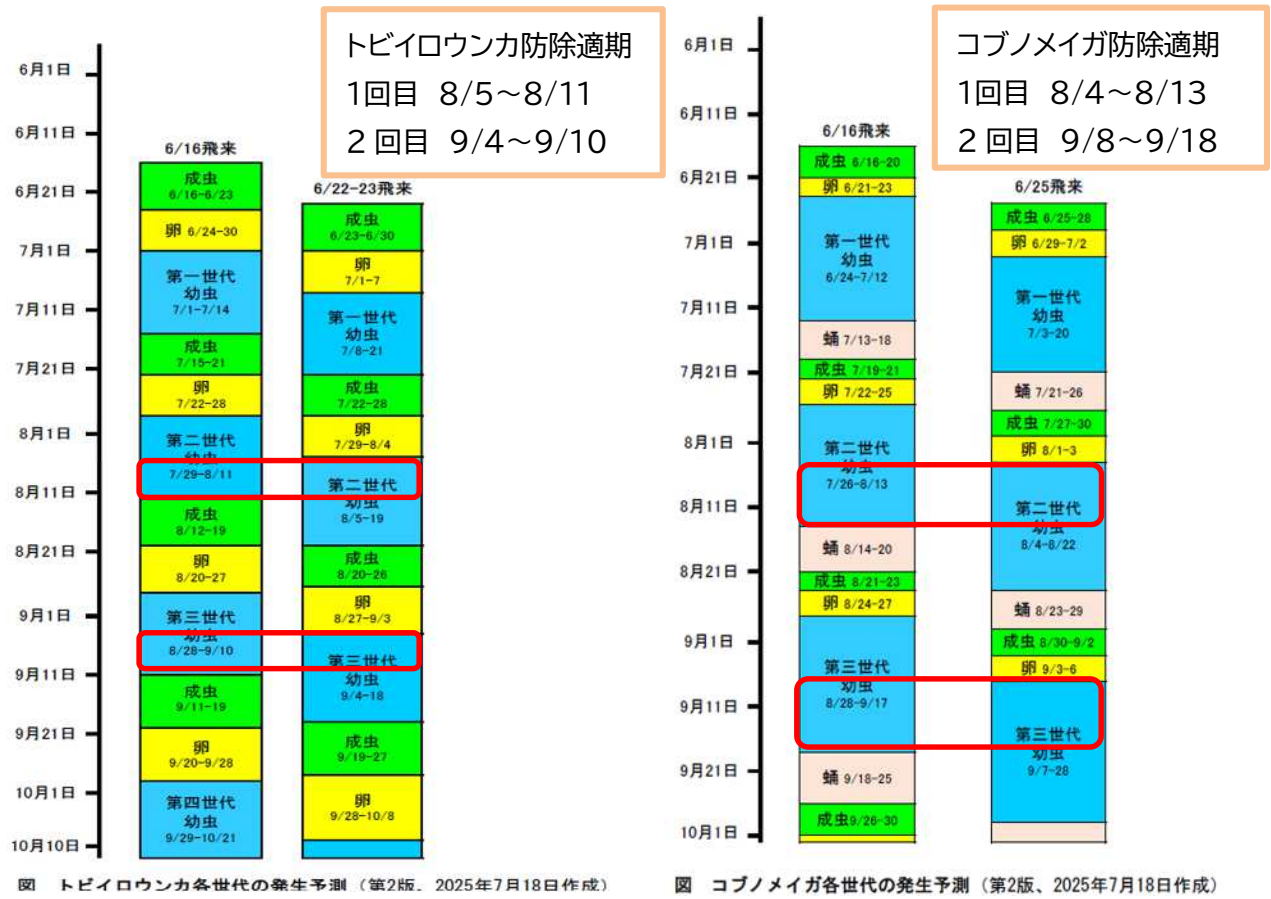
○雑草防除

- ・除草剤散布ができなかった圃場や散布が遅れた圃場、及び処理後に田面が露出した圃場などでは、放置するとヒエや広葉雑草が繁茂し、薬剤による雑草防除が困難となるため、中後期除草剤との体系処理を検討する。なお、藻類や表層剥離が多発し除草効果の低下が懸念される圃場でも、ヒエや広葉雑草の発生が懸念されるため、圃場の状況を確認し、中後期除草剤との体系処理を検討する。

対象	除草剤名	使用時期	備考
ヒエ類	クリンチャー I 粒剤	移植後 7 日～バヰ 4L 但し、収穫 30 日前まで	湛水散布（3～4 日は湛水）
	クリンチャー EW	移植後 20 日～バヰ 6L 但し、収穫 30 日前まで	落水散布。展着剤加用。
	ヒエクリーン I 粒剤	移植後 15 日～バヰ 4L 但し、収穫 45 日前まで	湛水散布（3～4 日は湛水）
広葉雑草	バサグラン粒剤	移植後 15 日～55 日 但し収穫 60 日前まで	落水～ごく浅く湛水散布。 最低3日間入落水しない。 高温条件下では、薬害が生じやすいので夕方散布。
	バサグラン液剤	移植後 15 日～55 日 但し収穫 50 日前まで	
ヒエ類 および 広葉雑草	クリンチャーバス ME 液剤	移植後 15 日～バヰ 5L 但し収穫 50 日前まで	落水～ごく浅く湛水散布。最低3日間入落水しない。高温条件下では、薬害が生じやすいので夕方散布。（展着剤無加用）
	フォローアップ I 粒剤	移植後 15 日～バヰ 5L （稲 4 葉期以降） 但し、収穫 60 日前まで	湛水散布（3～5 日は湛水）
	ワイドアタック SC	移植後 20 日～バヰ 6L （稲 5 葉期以降） 但し、収穫 30 日前まで	落水～ごく浅く湛水散布。（展着剤無加用）
	ロイアント乳剤	移植後 20 日～バヰ 5L 但し、収穫 45 日前まで	落水散布～ごく浅く湛水散布。

○病虫害情報（発生および防除）

- ・セジロウンカとトビイロウンカは6月16日～23日に飛来が確認されている。
- ・コブノメイガは6月16日頃から飛来が確認されている。
- ・今後、発生予測は随時更新されるため、防除の考え方等については、最新情報を農業技術防除センターのホームページで確認してください。[佐賀県 農業技術防除センター](#)



I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病虫害名 ^{注1)}	8月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)	
水稻 (早期)	紋枯病	並	斑点米カメムシ類   クモハカメシ ホリハカメシ	
	斑点米カメムシ類	やや多		
水稻 (山間早植え)	穂いもち	並		
	紋枯病	やや多		
	トビイロウンカ	並		
	コブノメイガ	やや多		
	斑点米カメムシ類	やや多		
水稻 (普通期)	穂いもち	並	 トビイロウンカ  イナカメシ	
	紋枯病	やや多		
	白葉枯病	並		
	もみ枯細菌病	並		
	トビイロウンカ	並		
	コブノメイガ	やや多		
	フタオビコヤガ	並		
	斑点米カメムシ類	やや多		
	1. 斑点米カメムシ類 水稻の出穂10日前までに畦畔を含めて除草を行うとともに、乳熟期（穂揃い期の約10日後）を中心に薬剤防除を行う。多発生の場合は穂揃い期とその7～10日後に薬剤防除を行う。			
	2. イナカメシ 他の斑点米カメムシ類と異なり、水稻の出穂始めに籾を吸汁して不稔を生じさせることから、出穂前に本種の発生を認めた圃場では、 <u>通常の斑点米カメムシ類の防除適期である穂揃い期～乳熟期の防除だけでなく、発生状況に応じて出穂期の防除を行う</u> （令和7年7月14日付け病虫害対策資料第8号参照）。			
3. 紋枯病 近年、多発傾向にあるため、各圃場における発生状況を確認し、発生を認めた圃場では <u>病斑が上位の葉鞘に進展する時期（液剤、粉剤の場合は出穂20～10日前を目安とする）</u> に防除を徹底する。				
水稻全般	1. トビイロウンカ 本種の発生状況は、田植え時期、水稻の品種、地域、これまでの防除の違い等によって異なるので、発生予測図（共通-図1）を参考にして、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、幼虫ふ化揃い期の防除を実施する。			

【斑点米カメムシ類】

・8月の気象予報では、気温が高く、多発生条件となっている。

※8月6日に農業技術防除センターより注意報が出されています。詳細は別途資料をご覧ください。

・出穂後の除草は、水田に斑点米カメムシ類を誘い込み被害に繋がるため、**出穂 10 日前までに畦畔除草**を行う。

・山麓部や河川敷付近など、例年発生の多い圃場では田廻りを励行し、**乳熟期（穂揃い期の約 10 日後）を中心**
に薬剤防除を徹底する。 防除はカメムシが穂に上ってくる夕方に行うと効果が高い。

表 4. 各品種別の草刈り時期の目安

品種名	出穂期（平年）	出穂 10 日前
ヒノヒカリ・ひなたまる	8/27	～8/17 頃まで
さがびより	8/30	～8/20 頃まで
ヒヨクモチ	9/10	～8/31 頃まで

※出穂期（平年）は、佐城管内における情報田のデータの平均値

【イネカメムシ】

・イネカメムシは、近年全国的に被害が拡大している斑点米カメムシの一種です。昨年、本県において広く分布していることが確認されています。本種は、水稻の出穂始めに糞を吸汁して不稔にし、大きな減収被害を生じさせます。他の斑点米カメムシ類とは異なる特徴があり、適期の本田防除が必要となります。



イネカメムシの成虫（左）及び幼虫（右）

（防除対策）

- 1) 圃場内をよく観察し、本種の早期発見に努める。特に、周辺より出穂が極端に早い、又は遅い圃場では、本種の飛来が集中するため、発生状況を注意深く観察する。
- 2) 出穂前に本種の発生を認めた圃場では、通常の斑点米カメムシ類の防除適期である穂揃い期～乳熟期の防除だけでなく、発生状況に応じて出穂期の薬剤散布を実施する。

【紋枯病】

・8月の予察では、気温が高く、多発生条件となっている。近年、多発傾向にあるため、発生を認めた圃場では病斑が上位の葉鞘に進展（垂直進展）する時期に防除を徹底する。（液剤、粉剤の場合は出穂20～10日前を目安とする）病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合は直ちに薬剤防除を行う。



※今年度から作付けを開始している「ひなたまる」は紋枯病に弱く、過去には紋枯病多発で倒伏した事例もあるため、**基幹防除を徹底する。**（R7年8月6日：微発生）

ひなたまる(R6年 8月) (R7年8月6日)

3. 乾田直播栽培情報(現在状況)

・5/19に播種した「夢しずく」は現在穂ばらみ期を迎えており、まもなく出穂期を迎える。

・5/28に播種した「さがびより」ではまもなく幼穂形成期を迎える。

・管内で実施されている乾田直播栽培は雑草被害も少なく比較的生育良好で進んでいる。



5/19 播種「夢しずく」



5/28 播種「さがびより」

4.大豆における今後の管理

1 大豆の生育状況

- ・ 7月3～4日播種の圃場で8～9葉期、7/12～13播種の圃場では6～7葉期となっている。
- ・ 7月20～22日に播種した圃場では、3葉～4葉展開期となっている。

2 干ばつ対策について

8/4以降、一時的にまとまった降雨があり、圃場の土壌はやや湿潤となっている。しかし、今後も降雨が見られず圃場の土壌が乾燥することが予想される。乾燥条件が続くことで、大豆の草冠が夜間も立っていたり、萎れ始める可能性がある。そのような圃場では、夕方以降にうね間灌水を検討する。

なお、平うねでの灌水は排水が遅延することから種子の腐敗を招くことが多いので、うね溝を設けるなどの事前作業を実施する。

【畝間灌水のポイント】



大豆での畝間灌水の状況（R6.8月）

・ 圃場が白乾しひび割れた状態になる前に灌水を行うようにする。

（過乾燥状態になると土壌内部に亀裂が入り、畝間灌水しても圃場の先端まで水が行き渡らない。）



乾燥により萎凋した大豆

注：うね間灌水後は雑草の発生が多くなるため早めに除草剤散布等の雑草対策を行う。

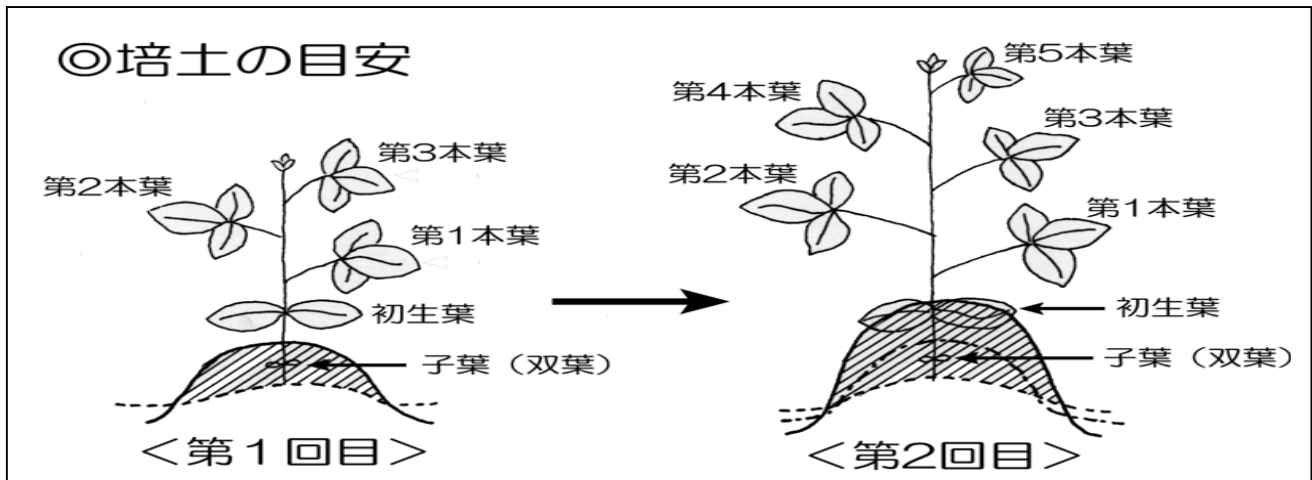
- ・ 晴天が続く場合は、コルゲート管の閉栓が土壌水分確保に有効である。



3 中耕・培土の実施

・7月下旬播種の大豆も中耕・培土の時期を迎えている。

8/4以降一時的に纏まった降雨があったことで、土壌はやや湿潤となっており、時期を迎え次第適宜中耕・培土を実施する。



中耕・培土は、1回目を3葉期頃、
2回目を5葉期頃の実施する。
2回目は、株元（子葉の下）まで土
がしっかりかかるように実施する。



4 雑草防除

○難防除雑草への対応

アサガオ類やホオズキ類の難防除雑草の発生が多い地域では、圃場内侵入防止に努め、見つけ次第手で抜き取る。圃場内に発生している場合、多発すると大豆の作付け自体が困難になるため、発生が少ないうちに、雑草の開花や結実前までの茎葉処理除草剤のスポット処理や手取りの防除に努める。

ツユクサ類（近年、特にカロライナツユクサが蔓延）は土壌処理剤の効果が十分ではないため、「プリグロックスL」や茎葉処理剤（大豆バサグラン等）での除草を基本とする。

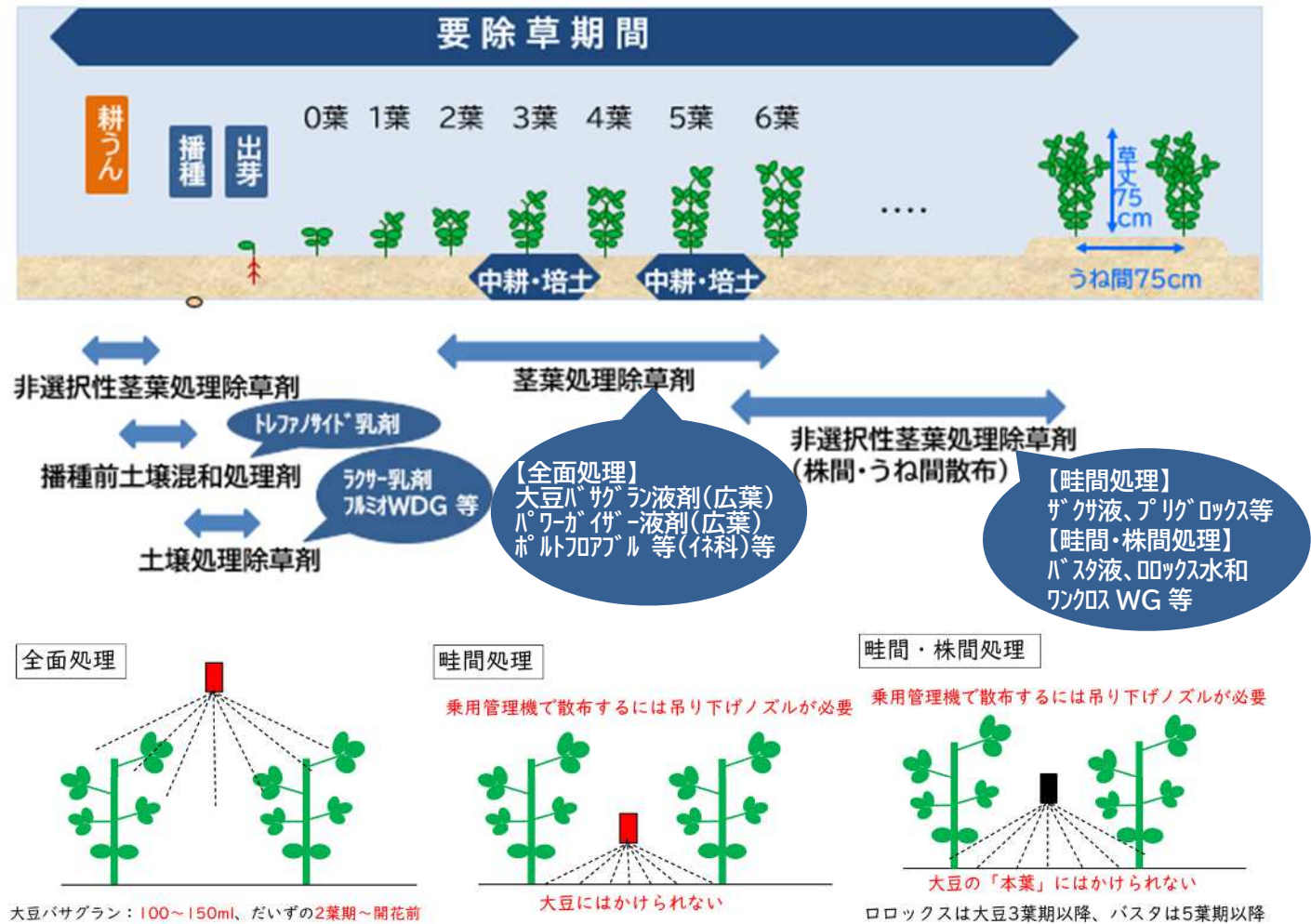
大豆は初期生育が早く、大豆の茎葉が繁茂することで雑草発生を抑制できるので、雑草の発生が少なければ、大豆生育期（2～5葉期）に中耕培土で防除が可能である。

※降雨等で除草剤の散布ができなかった圃場では、早めの中耕培土で雑草対策を行う。

	播種前	播種直後	2葉期 ～開花期	生育期
基本体系		ラクサー 等		
播種前に雑草が多い場合	ラウンドアップ マックスロード、 プリグロックスL 等			
ホオズキ類 多発圃場	※	ラクサー、 フルミオWDG		ラウンドアップマックスロード、バスタ、 プリグロックスL （うね間処理、バスタは株間処理も登録）
アサガオ類 多発圃場	※	フルミオWDG +ラクサー	大豆バサグラン	
ツユクサ類 多発圃場	プリグロックスL 等	（慣行剤）		プリグロックスL （うね間処理）

※ 必要に応じて散布

■除草技術と実施時期の目安



5 病虫害対策（発生及び防除）

【ハスモンヨトウ】

- ・夏季が高温少雨で経過した年は、発生が多く増殖に伴う被害拡大が懸念されるため、フェロモントラップの捕殺数や圃場毎に白変葉の増加に注意する。
- ・播種期が早い管内の一部圃場では白変葉が散見され、ハスモンヨトウの幼虫も確認されている。
- ・防除適期は、若令幼虫による白変葉が見られ始めた頃であり、防除が遅れ中齢幼虫以上（体長約2cm以上）になると、防除効果が低下するため、圃場をよく観察し適期防除を実施する。
- ・防除後約3日経過した後も高い密度で食害を続けている時は、再防除が必要である。
- ・ハスモンヨトウには、フェニックスフロアブル、プレバソンフロアブルは感受性が低下しており、使用を避ける。

【オオタバコガ・ウワバ類】

- ・気象予報では高温少雨が予測され、ハスモンヨトウと同様に、多発生の条件となっている。
- ・管内でもオオタバコガ、シロイチモジヨトウの発生による食害が確認されている。
- ・葉に大きな穴が開いた株が目立ち、周辺に青虫がいる場合は、オオタバコガによる食害の可能性が高くウワバ類やシロイチモジヨトウが含まれる場合もある。
- ・オオタバコガやシロイチモジヨトウには、ノーモルト、トレボン感受性が低下しており、使用を避ける。

表1. 防除薬剤（効果が高い薬剤）

	ハスモンヨトウ	オオタバコガ、シロイチモジヨトウ
薬剤名	プロフレア、グレーシア、プレオ、ディアナ等	プロフレア、グレーシア、プレオ、等



ハスモンヨトウ



オオタバコガ



シロイチモジヨトウ

○露地野菜情報 ～カンショ編 第2弾～

カンショの定植から約90日程度が経過し、現在はイモの肥大期に入っております。カンショの重篤な病気である「サツマイモ基腐病」の発病確認調査を試験場と協力し、生産者の圃場を巡回いたしました。発病株は確認できず、順調に生育しております。カンショは湿害に弱く、現在は降雨が少なく乾燥状態ですが、今後の台風や大雨に備えて、明渠設置やオーガによる排水対策、またカットブレーカーの実演会を行い、排水対策に努めております。目標収量である3t/10aを達成すべく、適正管理を行ってまいります。



基腐病発病確認調査



明渠設置した圃場



オーガによる排水対策



カットブレーカー排水対策研修会

令和7年産 水稻生育期間気象グラフ

(アメダス観測地点：佐賀, データ更新日：8月6日)

三神農業振興センター

